



Title	子育て家庭の孤立化の論理
Author(s)	榊, ひとみ; Sakaki, Hitomi
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 110, 65-84
Issue Date	2010-06-25
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.110.65">https://doi.org/10.14943/b.edu.110.65</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43268">https://hdl.handle.net/2115/43268</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	04-Sakaki.pdf



# 子育て家庭の孤立化の論理

榊 ひとみ\*

## The Logic of Isolation in Parenting Families

Hitomi SAKAKI

### 【目次】

1. 問題意識
2. 課題と方法
3. 仮説1における3つの要素の検討
4. 仮説1における3つの要素相互の関連
5. 子育て家庭の孤立化の問題を解決する見通し
6. 結論
7. 残された課題と今後の展望

【キーワード】 商品化, 子育ての特殊性, 子育ての規範意識, ケイパビリティ

### 1. 問題意識

乳幼児の虐待死を伝えるニュースがあとをたたない。子どもを死に至らしめる前に、また、深刻な事件となる前に、我々には何らかの打つべき手はなかったのかという問いが、生まれてくる。一部の報道では、「虐待など言語道断」という子育てに対する正論と親への叱責が飛び交うが、虐待のボーダーに位置する親たちに正論を語ることの無意味さを、汐見（2000）は、「精神的にマイナス状態にある人に正論をぶつのはその人に対するいじめに等しい」<sup>1</sup>と表現している。汐見は、「孤立感は、もともと頼りになると思っていた存在が非協力的であれば、それだけ一層強くなる」<sup>2</sup>とし、「物理的に」<sup>3</sup>パートナーが存在しているにもかかわらず、「心理的に不在になっている場合」<sup>4</sup>に育児のストレスが増大するとしている。

汐見は、虐待の要因やパターンが多く存在することを指摘しながらも、「第一要因としてのその人の育ちや現代の育児環境の変化からくる育児ストレスに、さらに何らかの促進要因が加わったときに、折檻や虐待が生じるということは共通している」<sup>5</sup>とし、その促進要因として「育児をひとりで行わなければならないという絶望的な孤立感」<sup>6</sup>を挙げている。

汐見は、家庭内で母親によってのみ育児が担われていることによるストレス要因が、折檻や虐待へと親を追い詰めてしまうことを明らかにしているが、そもそも、子育て中の家庭が、なぜ孤立してしまうかについては、直接的には述べていない。

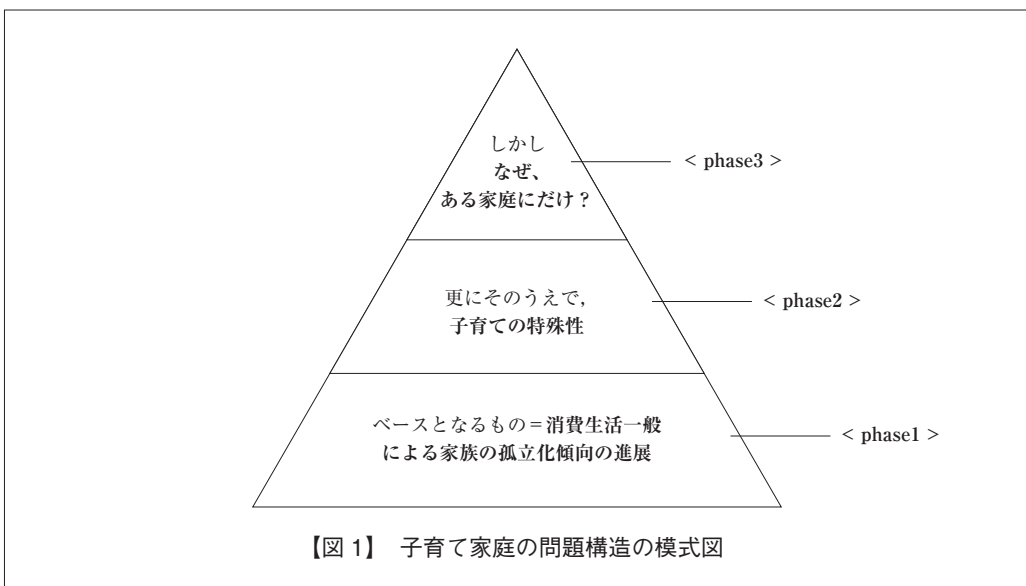
汐見が指摘した「育児をひとりで行わなければならないという絶望的な孤立感」を手掛かりに、本論では、子育て家庭がなぜ孤立するのかを解明することにより、「子育ての闇」の原因を明らかにしたい。「子育ての闇」とは、子育て当事者の親たちが、もがけばもがく

\* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程

ほど、問題解決の方向とは逆の状況を引き起こしてしまう、子育てのパラドキシカルな状況を指し示す。乳幼児を育てる親たちが折檻や虐待といった現象でしか、「子育ての闇」を社会にむけ、明らかにすることができなくなる前に、予防的な手段で真に「子育ての闇」から子育て親が解放されるために、我々にはどのようなことができるのかを考えてみたい。

## 2. 課題と方法

本論文における課題は、子育て家庭の孤立化の論理を明らかにすることである。課題を明らかにするにあたって、子育て家庭の孤立に対する問いと仮説を以下のように整理した。



### 【仮説1】

$$\text{子育て家庭の孤立} = \begin{matrix} < \text{phase1} > \\ \text{消費家族化・商品化} \end{matrix} \times \begin{matrix} < \text{phase2} > \\ \text{子育ての特殊性} \end{matrix} \times \begin{matrix} < \text{phase3} > \\ \text{親の自信のなさ} \\ \text{(背後に子育ての規範意識)} \end{matrix}$$

この仮説1は、まず当該社会においては、資本・商品による社会化により、消費生活一般のレベルで家族が孤立していくことを問題設定の前提としている。子育て家庭の孤立化のベースとしての商品化、消費家族化という問題である<sup>7</sup>。そのうえで、消費生活全般の一般的な議論とは区別し、「なぜ、子育てにおいて」という問題が、子育ての特殊性の問題である。ここでは、第一に子育てにおける親と子の関係が、逃げるできない関係であり、また選択の余地のない関係であること、第二に、親と子は「養育する」—「される」という関係を伴わざるを得ないという意味において、「非対称」<sup>8</sup>（稲沢・2002）の関係が避けられない場合があることを指摘しておく。

しかし、こうした関係は、どの親子にもありうる質のものであり、さらに、「ある家庭においてだけ、なぜ」という問題が浮かぶ。虐待や折檻は、消費家族化や商品化が進展し、選択不能で関係の「非対称性」をもつ親子一般におこるものではなく、ある特定の規定要因が加わったときに起こると考えられ、それを、仮説1では、子育ての規範意識との関連で、親自身の子育てに対する「自信のなさ」として示している。

本論においては、岩田美香(2000)の「二種類の孤立化」<sup>9</sup>論を援用し、岩田の議論のさらなる精緻化を試みる。その手続きとして、仮説1で提示した、消費家族化(商品化)論、子育ての特殊性、子育ての規範意識、さらに、人間らしい生活の保障を人間存在の尊厳と結び付けて論じたヌスバウムのケイパビリティ論<sup>10</sup>へと展開することで、仮説1を、結論部分では暫定的な結論として提示したい。

### 3. 仮説1における3つの要素の検討

#### (1) 消費家族化・商品化による孤立

##### 1) 岩田の「二種類の孤立化」論

岩田は、牧野カツコの育児不安研究<sup>11</sup>の成果を踏まえ、「放置されてきた育児困難」<sup>12</sup>を明らかにしている。生活困難層といわれる母親たちの育児や子育てを通して、育児不安の尺度では捉えにくい層をも研究に組み込み、育児の困難さが明らかにされる必要があることを強調している。岩田は、「一般的に母親が抱く育児の悩みや不安感」<sup>13</sup>を育児不安とし、「その中でも特に母親の心理的・意識的側面に注目して形に表そうとしたもの」<sup>14</sup>を、前述の育児不安と区別するために「育児不安」と鍵かっこつきで区別している。その上で、「育児不安や『育児不安』といった意識レベルでの現象形態の有無にかかわらず、広く生活・行動レベルを含めた育児の困難さを育児困難という用語で示していく」<sup>15</sup>としている。岩田は「『育児不安』という形で取り上げられ、社会的にも注目されている現象は、生活基盤が安定している母親たちに代表され、その問題や不安も顕在化されている場合が多い」<sup>16</sup>とした上で「生活基盤が脆弱であるために生じる育児の問題や育児不安は、潜在化されて見えにくく、時には放置されたまま育児の困難さが顕在化されない場合もある」<sup>17</sup>とし、「育児不安」の解消条件を欠落させているような、社会的に最も孤立しがちな母親の存在は、「育児不安」研究の中心には位置づいていないことを明らかにしている。

岩田は、母親が社会の中で取り結ぶネットワークを含めた編成的資源と構造的資源の質と量による育児困難の構造分析を行い、「放置されてきた育児困難」を明らかにし、このことが育児放棄の可能性になるという指摘をしている。岩田は、生活基盤が育児を規定していると結論付け、経済的側面からの育児分析の必要性を指摘したといえる。

さらに、岩田は、「育児不安」の発生については、「現代の育児困難を共通基盤としながらも、母親の心理的側面に注目することによって、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜していく中で作られた産物である」<sup>18</sup>としている。それらは競争原理に裏付けられた不安と情報に煽られて「育児・教育サービスを購入することで解決を図」<sup>19</sup>ろうとするが、そのことが更に不安を増幅させるという。

岩田は、「競争原理に裏付けられた不安と情報に煽られて、育児や教育サービスを購入し」<sup>20</sup>、「表面的な解決」<sup>21</sup>を図ることでより一層の「不安を高めていく」<sup>22</sup>孤立と、「放置されてきた

育児困難」の二つの孤立を明らかにしている。これが、岩田のいう「二種類の孤立化」である。

前者は「情報やサービスを求めて外注化していけばいくほど、母子のカプセルが社会から孤立していくというパラドックスのような孤立化」<sup>23</sup>であり、後者は「経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化」<sup>24</sup>である。

この指摘は重要である。岩田は、「二種類の孤立化論」において、牧野が必ずしも明らかにしてこなかった、顕在化されない、放置された育児困難の問題を指摘している。これは筆者が冒頭で記した乳幼児の虐待や折檻の問題状況と連結する。

しかし、ここで更に明らかにすべき点は、前者の孤立と後者の孤立の相互関係についてである。すなわち、外注化（商品化）による孤立と「経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化」の間には、どのような関係があるのかが明らかにされなければならない。前者は、当該社会における「外注化」の構造変化の問題であり、後者は、「経済的要因」は経済的圧力、「社会的偏見」は社会的圧力として理解される。仮にこうした理解でよければ、こうした経済的・社会的圧力によって疎外され、排除された結果として現れてくる孤立とってよい。

この問題設定は、この2つの孤立化の因果関係、つまり、どういう外注化の構造のもとで、どんな規範意識が生まれ、その結果、どんな社会的な遮断が生じたのかを明らかにしなければならないことを意味している。

## 2) 子育てにおける社会化の構造変化

ところで、岩田が指摘した2つの孤立化のうち、前者の孤立化（外注化）は、宮崎（1992）の指摘した3つの社会化論と接続する。宮崎は、社会化の3つの形態について、①資本による商品化、②国家・自治体による社会化、③協同的社会化の区別があることを指摘している<sup>25</sup>。宮崎による3つの社会化の区別の指摘は重要で、社会化一般から、資本による商品化を区別している。資本による商品化とは、人間の自己疎外であるが、人間を、「商品所有者」<sup>26</sup>としての人格に限定し、その次元での相互承認関係にとどまることを指摘している。換言すれば、資本による商品化は、人と人とのつながりや社会関係を、資本の論理から編み直す。子育ての場面に限定して言及すれば、商品やサービスがあれば、子育てが可能であるかのような錯覚を親に齎す。更に、資本による商品化は、子育て親の不安や悩みを商品やサービスの購入によって問題解決することを押し進め、そのことによって、協同的社会化の契機はさらに弱められる。協同的な子育ての社会化が進展している社会においては、資本による社会化（商品化）に頼らずとも、親は子育てが可能となるが、逆に、資本による社会化が進展していく過程においては、親をより孤立させる状況においやる。

一方、汐見（1996）は、子どもを社会化する3つの場について述べている。汐見は、家庭における「一次的社会化」<sup>27</sup>、地域社会における遊びや行事、仕事に加わることによる「二次的社会化」<sup>28</sup>、学校などの制度による「三次的社会化」<sup>29</sup>の3つの次元での社会化が、子どもの育ちにとって、必要最低限の条件であることを明らかにしている。汐見は、地域社会における「二次的社会化」の変化によって、家庭での社会化の役割や負担が増えたことを指摘し、その結果、家庭が、「商業的支援」<sup>30</sup>に頼らざるを得ない状況になっていると説明している。

汐見のいう「商業的支援」は、岩田のいう「外注化」であり、宮崎のいう「資本による社会化（商品化）」と連結する。宮崎の議論は、子育てに特化したものではなく、一般的な社

会化を3つの形態に区別した議論であるが、商品化が、なぜ人々を孤立させるのかについてより普遍的な説明を与えている。商品やサービスを媒介した社会化は、その背後にある人間の労働を抽象化し、人間と人間とが取り結ぶ社会関係を、商品と人間の関係に置き換えてしまう。サービスや商品を購入する子育て親は、商品の向こう側に存在する人間の労働にまで遡って、商品の有り難みを実感することはできない。それは対価を支払うことによって「得られることは当然」の関係に、置き換えられてしまうからである。

子育てにおける商品化の進展は、子育て家庭が、汐見のいう「二次的社会化」の場である地域社会から孤立しても、商品やサービスを購入できる限りにおいては、子育てが機能不全に陥ることなく、なんとか、子育てを切り盛りしていくことを可能にする。このことは、子育てが、本源的には、当該家庭だけでは成り立たない活動であるにも関わらず、商品に依存すれば子育ては、当該家庭だけでも成立するかのような、転倒的な子育て活動に転化する。その結果、子育て家庭の孤立は、ますます深化していくことになる。

子育てにおける「3つの社会化」における構造変化の概観は、以下のように整理される。

1955年から1975年の20年間における産業構造の変化は、農村型社会から都市型社会への地域社会の変貌を齎した。地域社会の変貌は、必然的に子育てにおける社会化の構造変化をもたらすことになった。

高度経済成長の中、働く母親たちの保育所づくり運動は、国家・自治体による子育ての社会化の保障を求める契機となった。しかし、国の財政が逼迫する中、保育予算の削減、児童福祉法の改悪等、国家・自治体による子育ての社会化は、資本による社会化へと転化する傾向を強めた。認定こども園にみられる保育の市場化の問題、待機児童解消による保育の質の低下など、国家による子育ての社会化も、大きな問題を抱えている。

こうしたなか、必然的に、子育てにおける社会化の構造変化は、資本による子育ての社会化、商品化が支配的になっていくことになる。国家・自治体による子育ての社会化は、資本による社会化を前提とし、あくまでもそれを補完するものとして、機能しているといえる。

### 3) 「横並び」の生活様式と子育ての規範意識

日本における高度経済成長は、大量生産と大量消費を前提とした。これにより人々の消費生活では、「人並みになる」<sup>31</sup>「横並びになる」<sup>32</sup>という生活モデルが形成されていった。少し頑張れば、誰もが手にすることができる、そうした生活スタイルが保障されることが大量消費を促すためには必要な条件であった。少々無理をすれば、スタンダードな生活様式を誰もが手に入れることが、現象的には可能となる。そうした傾向が強まれば強まるほど、無理をしても、その生活様式を手に入れることができない当事者には、負の感情が生じることは想像に難くない<sup>33</sup>。

こうした理由によって、岩田の指摘した後者の孤立化である「経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化」が、もたらされると考える。

大量消費の論理によって、「横並び」の消費生活様式が形成される。そうした消費生活様式に媒介されて、子育ての規範意識にも「横並び」の考え方が浸透していくことになる。しかし、経済的に脆弱な子育て家庭において、商品やサービスが買えない場合には、「横並び」の世間の感覚から排除されてしまうことにつながる。こうした意味において、子育ての規範意識は社会的な圧力をともなったものに変容していく。

事例を見てみよう。

- L) 「お金がない」ってということなんだけど、その人の家のレベルによって本当にお金がないのか、その人のレベルの生活を維持するために、子どもの習い事や、木のおもちゃを買い揃えた環境を維持するために「お金がない」っていうのか。人の「うち、お金がないの」っていうのを、そのまま、額面通り、受け止めていいんだろうかと思うことが、ママ友ともだちの、ママ友グループのなかで集まると、時々思うことがある。
- O) あ～。どこを基準にするかね～。
- L) そして、それに惑わされてはいけない。うちは、木のおもちゃはないけれど、でも、そこで、「あせってはいけない」「あせってはいけない」と、言い聞かせている。
- O) 「お金がない」レベルね。ははは。
- L) 「あなた、習い事、3つも子どもにさせているでしょ～？ 1歳の子に」って。「お金がない」「お金がない」っていうけど。
- O) そりゃ、お金はないよね。なくなるよね。
- B) 金銭レベルが、一緒の人と付き合っていたら、お互い楽だけど、そうじゃなかったら、やだよね。
- O) 金銭レベルね～。収入レベルっていうことかな？ まあ、いってみると。
- L) うわべの付き合いは、多少。(だけど)あまりに差があると、長く続けるのは大変かもしれない。人と人との繋がりとなると、それは超えられるかもしれないけれど。超えられるけど。超えられると思うし。どっちかが、ちょっと背伸びしたり、「あ～」って思いながら。

【エピソード1】

エピソード1は、ある学習実践の中で語られた母親たちの会話であるが、この中で注目するのは、Lさんの語りにある「木のおもちゃ」である。一般的に、プラスチック製の玩具と比較し、自然材を使用した「木のおもちゃ」の市場価格は高額である。「木のおもちゃを自宅に揃える」には、経済的な基盤が必要となるが、この会話の文脈においては、「木のおもちゃを買い揃えること」が子育て家庭のスタンダードとなっている。また、母親同士の会話の中で、木のおもちゃを持っていないLさんは、自分自身に「あせってはいけない」と言い聞かせていることから、「木のおもちゃを買い揃えること」は一種のステイタスになっていることもうかがえる。「木のおもちゃを買い揃えられる」階層とのつきあいに対して、Lさん自身は「長く続けるのは大変かもしれない」と言っている。

「あせってはいけない」というLさんは、「横並び」の消費生活様式を対象化し、競争を回避しようとしている。しかし、「木のおもちゃを買い揃えている」階層との意識的な隔たりを「ちょっと背伸び」と表現している。ここでは、「木のおもちゃ」を購入できるか否かという点が焦点となっており、「木のおもちゃ」を「買える」層と「買えない」層の二極に分断されている様子がうかがえる。

#### 4) 小括

大量生産・大量消費によって生み出された「横並び」の生活様式は、子育て家庭にも浸透し、そのことによって、親の子育てにも「横並び」の意識が浸透していくこととなった。しかしそのことが、逆に、「横並び」になれない場合の家庭においては、子育ての規範意識に社会的圧力が加わっていくことで、排除や回避の原因となることが確認された。

以上のことから、岩田の「2種類の孤立化」論における前者の孤立、すなわち、外注化による孤立は、日本の子育てにおける社会化の構造変化に伴って発生したものであったが、このことが、後者の孤立、つまり「経済的要因や社会的偏見による物理的に遮断される孤立」を産み出していることが明らかになった。

### (2) 子育ての特殊性による規定

#### 1) 親子関係の不可避性

本節では、仮説1の第2要素として考えている、子育ての特殊性について検討していく。この項では、まず、親子関係の不可避性について考えてみたい。親と子の関係については、当然のことながら、子は親を選択できず、また、親は子を選択できない。子どもの自我が発達してくる2歳頃になると、子どもからは「イヤ」「ヤダ」が連発されるようになる。子どもを親の思い通りにすることができるなら、親にストレスもないだろうが、そうしたことはあり得ない。このため、人間と人間の関係としての対人関係が生まれる。そうした時に、親がパニックを引き起こすこともある。「子どもが好きになれない」<sup>34</sup>「子どもをひどく叩いてしまう」<sup>35</sup>といった事例にみられるように、暴力的な振る舞いが表出してしまう場合もある。親の側がこうした親子の不可避な人間関係そのものに絶望的になり、パニック状態に陥ってしまうのである。自身の子どもであっても、自身の子どもであるからこそ、「突き放したくなる」こともある<sup>36</sup>。

山本健慈(1999)は、現代の親たちがマニュアルで育ってきた世代であることについて言及し、その世代にとって子育てとは「人生でもっとも難解な応用問題」であり、この最も難しい応用問題に直面するのは、子育てを行うときが初めてであることを指摘している<sup>37</sup>。市原悟子(1997)は、親たちがこれまで多様な人間関係を経験してこなかったことを示唆している<sup>38</sup>。

この「多様な人間関係の経験」の中においてこそ、目の前にいる人間から逃げずに、その矛盾した関係を引き受け、人間関係のトラブルを乗り越えていくような、粘り強さとしなやかさが培われていくのであるが、こうした経験を一切しないまま、育ってきた親にとっては、四六時中、常につきまとい、逃げるができないような子どもの存在は、親にとっては生まれて初めて経験する他者である。それまで親が経験してきたような、友人や恋愛の対象の他者とは次元の異なる、逃げるができない他者が子どもの存在なのである。

#### 2) 親子関係の「非対称性」

他人同士が結婚し、家族となったパートナーとの関係も、一定の不可避性をもつ関係であるが、たとえば、パートナーに対して思い通りにならないような事態が発生した場面には、距離をおくなり、冷却期間を設けるなり、それなりの対処が考えられる。

しかし、特に、乳幼児期の子どもと親の関係は、「養育する」－「される」、 「保護す

る」－「される」という関係を伴わざるを得ないため「非対称」<sup>39</sup>の関係性が避けられない場合がある。この「非対称」の関係について、親が自覚的でない場合、「支配する」－「される」関係に陥ってしまうこともある。

品田知美（2004）は、逆に「子どもにつくす日本の親」<sup>40</sup>の問題点を、「超日本式育児」と命名し、指摘している。品田によれば、「超日本式育児」<sup>41</sup>とは、「子どもの欲求にはなるべく応えていく」<sup>42</sup>という子育ての方法を指す。「超日本式育児」には、母親は子どもとは異なる独自の欲求をもつ存在であるという認識が抜け落ちてきているという。このため、子どもの際限のない欲求に振り回され、母親は疲れ果ててしまう。しかし、ある限界を超えたときに、子どもの欲求に従順に従ってきたことが、逆に今度は、母親が子どもに従順に従わせえるための手段として、折檻や体罰を用いる契機となってしまうことを品田は示唆している<sup>43</sup>。

関係の「非対称性」において、親が「子どものペースに振り回され」<sup>44</sup>、親がなんらかの原因によってコントロール能力を失ってしまう状況に直面した場合には、逆に、親は子どもを恐怖でコントロールする状況に陥ってしまう。親子の「非対称的」な関係を自覚しつつ、子どもと親が、それぞれに独自のニーズをもつもの同士として対立する場面も想定し、ほどほどの折り合いの付け方を身につけていくことが、論点となっていく。しかし、このことは、教条的に教授されるのではなく、こうした親の矛盾する息苦しさや、親の葛藤する経験に寄り添いながら、経験に新たな意味を付与する形での学習でなければ、このこと自体が、親を「理想の親像」と「しかし現実にはそうできない自分」の二つに引き裂くのではないだろうか。

### 3) 小括

この節では、仮説1の第2要素である子育ての特殊性として、親子関係の不可避性と「非対称性」について検討した。前節では、日本の子育てにおける社会化の構造変化、すなわち資本による社会化が支配的になってきたことを示した。こうした状況において、子育てにおける親子の不可避性はより強められることになる。一般に消費生活は、個々の家庭を前提にしていると考えられるためである。親子という対人関係がもつ、その不可避性、「非対称性」は、<phase1>の消費家族化・商品化の進展の中で、相乗的に深化すると考えられる。

## （3）親の自信のなさや子育ての規範

### 1) 他児比較による子育ての標準の獲得

この節では、仮説1の第3要素として提示している、親の自信のなさや、子育ての規範意識の関連について検討していく。この項では、まず、他児比較による子育ての標準の獲得について考えてみたい。

先に述べた岩田美香の研究において、彼女は、「母親が『社会的に孤立しがちで、母親だけに責任が集中しやすい』という現代の育児を担っていく時、氾濫している情報や知識の中では、『ほかの子どもやほかの母親との比較』をしていくことでしか、『育児の標準（スタンダード）』は見いだせない」としている<sup>45</sup>。

ある事例をみてみよう。これは、ある母親の子育て日記である。子どもと幼稚園の入園説明会に参加した場面の記録からの抜粋（エピソード2）と、子育てサークルでのトラブルを記録したものからの抜粋（エピソード3）である。

今日は、幼稚園の入園説明会があった。A（子どもの名前）は時々、先生のいうことを聞かなく、コントロール不能状態になる。簡単な知育検査のようなものがあった。先生とのお話は上手くできていたが、2つのものを1つにすることはできていなかった。場慣れしていないのと、数の1対1対応の認識、「いくつ？」の意味がよくわかっていなかった。先生の「この積み木、いくつある？」という質問に対して、「つみき」という答え。私は、少し自己嫌悪だ。「え？ できないんだ。ま、仕方ないかな。早生まれだし。でも、2月生まれのMちゃんは、できているのに」とちょっと僻んで、落ち込んだ。

【エピソード2】

2歳児の児童クラブに通っている子どもの中でちょっとした喧嘩がおこり、A（子どもの名前）が他の子に「あの子、怪獣だから」と言われたことが、ひどく私の心を咎めた。怪獣に育ててしまったのは私？ それは、私が怪獣だから？ 次の日、母乳育児の先生のところへ、断乳に行くことになっていた。私が感情的にAを怒ってしまうことを、「とんでもない母」と非難され（当たり前だが）どうしようもない気持ちになってしまった。この先、Aをどう育てていったらいいのか、全く、自信喪失の状態になる。

【エピソード3】

エピソード2で、Aちゃんの母親は、日記の中で、Mちゃんの発達尺度から、Aちゃんを「比較」し、「ちょっと僻んで」「落ち込んでいる」様子を記している。この場面では、Aちゃんの母親は、Aちゃんに対して、「できないこと」の意味づけを「早生まれだから」としてはいるものの、「2月生まれのMちゃんはできているのに」と、子育ての標準を「できている」Mちゃんに求めている。

また、エピソード3では、児童会館での同じ2歳児の集まりで、他児から「怪獣」と言われ、そのことをひどく気にする様子が見え始める。2歳の他児の視点から、Aちゃんが、「怪獣」と意味づけられるということは、そこに、他児の評価尺度が加わっていることを意味する。他児の視点から見た他児自身とAちゃんとの比較によってなされた意味づけだといえる。さらに、Aちゃんの母親は、そう意味づけられたことを、自分の子育ての結果として理解しようとしている。さらに、次の日、「感情的に怒ってしまうことを『とんでもない母』と非難され」「どう育てていったらいいのか、全く、自信喪失の状態」になっていく。

この場面からは、Aちゃんの母親の子育てに対する自信のなさが、読み取れる。汐見(2000)は、現代の子育て親の世代が、家族機能不全の中に育ち、アダルト・チルドレンの様相をもつ世代であり、また、他者に過剰に気遣う集団心理の中で思春期時代を過ごしたこと、異質への許容性を十分に訓練されずに、消費化社会の進展に伴って同質の友達を選ぶ傾向にあることなどを指摘している<sup>46</sup>。

この汐見の指摘に加えて、子育てが同時に社会的に評価されてしまうこと、そしてそのことを母親自身が内面化していることを、このエピソード2,3は、物語っている。その評価は、他児との比較によって獲得される子育ての標準を尺度として行われる。「早生まれのAちゃん」というその子の発達の独自性によってではなく、「2月生まれのMちゃん」との比

較によるものは、前述したとおりである。この「子育てが社会的に評価されてしまうこと」は、エピソード3における、母乳相談所の助産師が、「とんでもない母親」と評価していることの事例によっても示されている。親としての責任を、親としての価値意識も含めて、それらは、社会的に評価されているのである。

「そんな子育てしていて、あなた、大丈夫なの？」と実の母親に責められたという事例は、よく耳にする話だが、実の母からだけではなく、同世代の親たちからも「あの母親は、何をやっているんだろうね」という冷やかな評価を与えられることもある。自分自身のことだけなら、封じ込めておけても、自身の「分身」と見られがちな子どもを通じて、自身の子育ての「逸脱」が、社会的に露わにされてしまう。また、かつて職業を持っていた母親であれば、職場での自分の業績が、数値化され、対象化され、評価されることは、自明のことであるが、子育てにおいては、子育てに対する努力が報われなかったり、努力の結果がすぐに出なかったり、また、自分の努力が評価されないことに対して不満を募らせることも、よく聞く話である。しかも、当然ながら、子どもも一つの人格を持つ存在であり、親の思い通りにはならない。親だけが子どもを育てているわけでもないにも関わらず、親は、自分の子育ての結果が、子どもの所作や振る舞いに反映されて、対象化されたもの、結果として現れたものとして認識してしまう。エピソード3の「怪獣（と言われるよう）に育ててしまったのは私？」という言葉はまさにそのことを表している。また、子育てサロンなどでは、他の子どもとの関係を必要以上に気にする場面も数多く聞かれる。他児と比較し、わが子の発達は順調なのかというような視点が存在しているのである。

## 2) 自分の子育てを叱責される嫌悪感

エピソード3には、母乳相談所の助産師にAちゃんの母親が「とんでもない母親」として、叱責された場面が含まれていた。助産師に叱責され、Aちゃんの母親は、「どうしようもない気持ちになってしまった。この先、Aをどう育てていったらいいのか、全く、自信喪失の状態になる。」とその苦しい思いを吐露している。Aちゃんの母親自身、「感情的に怒ってしまうこと」を、良いことだとは認識していない。助産師に非難されたことを「当たり前」と表現していることから、非難されて当然のことをしてしまっているという自覚があることがうかがえる。しかし、非難されることを覚悟してでも、助産師にAちゃんの母親が打ち明けようとした思いとは何だったかに注目してみる必要がある。

汐見が、その講演会や、著書（2000）においてよく引用する保健師の言葉が印象的である。汐見が引用しているのは、『読んでくれて、ありがとう』のなかにある読者からの手紙である。夜泣きのひどい、当時3カ月の子どもを抱えた母親は、眠れないストレスが限界を超え、「まだ何もわからない赤ん坊をひっぱたいてしまったり、布団をかぶせたくなる心境にまで達していた」<sup>47</sup>という。そんな中、彼女は、子どもを3カ月健診に連れて行き、保健師に悩みを打ち明けると、「えっ、ほっぺをたたいたりしたの？ そんなのふつう、ふつう、気にすることないわよ！」<sup>48</sup>と保健師からは、思いがけない言葉が返ってきたという。「いろんな答えを予想していたのに、こんなに明るく同意してくれるなんて…」と続く。意を決して悩みを打ち明けた母親は、すっかり心が軽くなり、「夜泣きもこの子の個性、マイペースで気長に育てよう、夜寝なければ昼寝すればいいんだと、考えるようになった」<sup>49</sup>という。

本文の冒頭で「精神的にマイナス状態にある人に正論をぶつのはその人に対するいじめに

等しい」という汐見の言葉を紹介しているが、まさに、エピソード3の助産師と、保健師の言葉は対照的である。日置真世(2009)は、その著書の中で、「子育てに揺らいだとき」<sup>50</sup>に、「受け止められることの重要性」<sup>51</sup>を指摘している。「誰かを責めることは、たとえそれが正しいことであっても何も生み出さない」<sup>52</sup>としている。汐見の引用においては「同意」が、日置の指摘においては、「受け止められることの重要性」が両者の共通点として浮かび上がってくる。

親が子育てに自信をなくし、とまどいを隠せないときに、背後にある事情をよみとき、読み解くことができないのであれば、なんらかの事情があるのだらうと察する適切な配慮が、援助者には求められるだろう。また親の側も、適切な配慮に欠ける支援に、仮に遭遇したとしても、その支援者の背後にもまた、なんらかの事情があるのだらうと察することにより、対立する両者に、対話の可能性も生まれてくる。

#### 4. 仮説1における3つの要素相互の関連

##### (1) 子育ての規範意識の二重性

前節では、仮説1の3つの要素をそれぞれ検討したが、この節においては、この3つの要素の相互の関連について検討していく。まず、<phase1>の消費家族化・商品化の検討では、大量生産・大量消費の論理によって、人々が「横並び」「人並み」の消費生活様式を求めるようになり、子育ての様式自体にもこの大量生産・大量消費の前提となる「横並び」「人並み」の消費生活様式が浸透していったことが確認された。これに媒介され、子育てにおいても「横並び」の規範意識が形成されていくことになった。また、このことにより、経済的に余裕のない子育て家庭は、「世間体」を気にせざるを得なくなり、「世間」からの排除がおこることも指摘した。このことは、ある特殊な状況にある家庭（この場合は、経済的に余裕がない家庭）に不利をもたらすという意味で、その子育ての規範意識には社会的圧力が伴っていることも確認された。

また、<phase3>の親の自信のなさとの関連の検討においては、親の自信のなさが、より「確かな」子育ての水準を求めていくことを検討した。「自分のやっていることは、本当に子どもにとっていいことなのか」と自問する親は、その答えを求め、他の親の子育ての経験を聞いて安心感を獲得しようとする。それを聞き、安心し、「自分の子育ては、間違っていない」と自信を取り戻すこともある。親は、子どもの最善の利益のために、他の親の経験や情報に頼るのであるが、寧ろ「横並び」「人並み」が安心感の基準となるため、標準的な子育てでなければ、「安心した子育て」にはなりえないという逆転現象が生れる。どういう子育てが、なぜ標準的なのかということ自体が問い返されないままに、周りの親の多くが行っている子育てが「標準的」であるから、そうした子育てを行っていけば間違いはないだろうという判断があるのではないかと考える。しかし、こうした子育て規範意識は、前述のとおり、社会的圧力を伴った規範意識であるから、「標準的な、社会的に要請される子育てでなければ、いい子育てをしているとは言えない」というように親自身の視点を変容させてしまう。当初、不安を抱えた親は、他の親子の様子をうかがい知ることによって、周りの親子との共通点を見出し、不安は解消され、安心されることを想定する。しかし、実際には、安心感は得られずに、逆に不安が募っていく。それは、子どもの成長発達

を心から願い、子どもの最善の利益を保障する点から、親が自分の子育てのあり方を問いはじめても、「どうい子育てがなぜ標準たりうるのか」という点が問われないため、結果的に、当該社会システムを前提とした子育て像に包摂されていくことになる。このため、親は、子どもの成長発達を願い、それを保障するために腐心するが、そのこと自体が、転倒的に作用し、子どもに「できれば仕事にあぶれることなく、収入を確保し、経済的に自立すること」を求めることにもつながっていく。それは、当該社会システムを前提にした次世代の労働力となる子ども像を求める親の子育てのありかたなのである。

このことは、子育ての規範意識そのものが二重性をもって存在していることを意味している。子どもの成長発達を目指すべき方向も、当該社会システムに規定されているといえるだろう。

こうした二重の側面をもつ子育ての規範意識は、子どもの個性・多様性を表面的には認めながらも、実質的には、当該システムを前提とするような価値基準を親に内面化させるのである。

## (2) 商品化された世界を前提にした評価の視点

親自身の「分身」とみられがちな子どもを評価されることに関しては、前節でも取り上げたが、その子どもに対する評価の視点がどのような質をもつものなのかに注目する必要がある。その評価の視点は、既に商品化された世界を前提にしている。親の評価の視点は、子どもが将来、どれほどの労働力商品としての価値を持つのかということ、親が意識するにせよ、しないにせよ、暗黙の基準としているのである。親の評価の視点とは、社会の、子どもに対する評価の視点を親が内面化してもつ評価の視点なのである。

先に取り上げたエピソード1の母親たちの会話の中に、1歳児の子どもに3つの習い事をさせている話が登場している。このことは、親が「子どもの将来」を考えればこそ、習いごとをさせているかのように聞こえるが、しかし、この親が考える「子どもの将来」とは、商品化された世界を前提とした社会なのである。

## (3) 小括

以上のことから、仮説1における3つの要素の相互の関係については、図2のような図式化が可能となる。

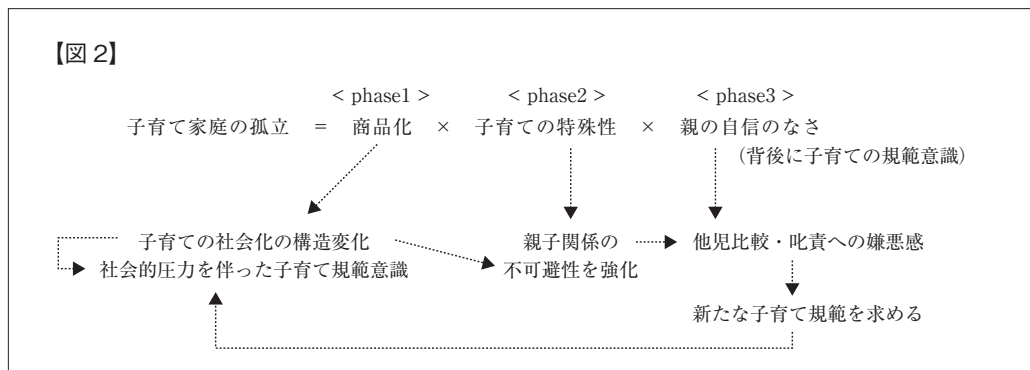


図2のような構図で3つの要素が次の要素を産み出すとき、子育て家庭の孤立化は相乗的に深刻化していくことになる。ではどのようにしたら、この孤立化の相乗図式から抜け出すことが可能になるのだろうか。

## 5. 子育て家庭の孤立化の問題を解決する見通し

### (1) 社会関係の変革をみとおした子育て支援

子育てにおける人間の協同性が、その社会化の構造変化によって、現象的には潜在化し、みえないものになってしまったことは、親の背後にある社会関係が見えなくなるような、資本による社会化が支配的になってきたことによるものであった。マルクスが指摘するように人間は類的存在であり<sup>53</sup>、「人間は自己自身にたいして、眼前にある生きている類にたいするようふるまう」<sup>54</sup>存在であり、このことは人間の協同性を支える人間の本質を表現しているといえる。

親が子育てにおける協同性を、現象的に失ってしまっているようにみえる社会関係においては、自身の子育ては、個人の責任に属することとして現象する。しかし、客観的にみれば、子どもが育つプロセスは、親だけに規定されているものではない。親の背後にある社会関係が見えなくなるような社会化が、つまり商品や資本による社会化が、まるで子育てが親だけに規定されているかのような、転倒的な社会関係の理解を促している。したがって、たとえば、アダルト・チルドレンのような親自身の育ちの問題に関しても、そこに主たる原因があると見るよりも、寧ろ、親がある種の脆弱性を抱えている場合に、それらが大きな不利となってしまうような社会関係にこそ、問題があると考えたほうがよい。例えば、親のパーソナリティの問題においても、積極的に人と関わるのが得意なパーソナリティを持つ親と、そうしたことに苦手意識をもち、内向的な性格を持つ親とでは、子育て問題の現れ方も異なってくる。ある種のパーソナリティを持つ親が極端に不利を背負ってしまうような、社会関係自体の問題として考えたほうがよいのではないだろうか。

しかし実際には、子育ての問題に関しても、とりわけ母親のパーソナリティに起因する問題として、理解されてしまいがちな社会関係が、親子のあいだに浸透している。「怪獣に育ててしまったのは私？ それは私が怪獣だから？」というAちゃんの母親のつぶやきは、子育ての問題が母親のパーソナリティに起因する問題として理解されている社会関係そのものを、母親が内面化していることを明らかにしている。そうした理解が、子育ての矛盾をますます深刻化させていく。ある「弱さ」（客観的には、弱さではない）を抱えた親を追い込んでいくような社会関係そのものを作り変えていくことが、子育て支援の基本に据えられなければならない。それは、ある種の「弱さ」や、ある種のパーソナリティを持つことが、子育てにおいて、不利にも、マイナスにもならないような新たな意味づけによって再構成されることにほかならない。それは、ある種の「弱さ」や、ある種のパーソナリティを持つことそのものが尊重され、人間が尊厳ある、価値ある存在として扱われることを意味する。このことを考えるために、ヌスバウムのケイバピリティ論を検討したい。

## (2) ヌスバウムのケイパビリティ論が示唆するもの

### 1) ヌスバウムの人間観

ヌスバウムの関心は、「人間のケイパビリティがマルクスの言う“真に人間的”つまり人間に値するものになるレベル」<sup>55</sup>にあり、そこに含まれる「人間の価値や尊厳」<sup>56</sup>を問題にしている。ヌスバウムは、人間を「活動し、目標や計画をもつ存在として、自然の機械的な作用以上に畏敬の念を起こさせるものとして、そして多くの中心的課題を達成するために支援を必要とする存在」<sup>57</sup>として見ている。彼女は、「真に人間らしい生き方とは、一貫して実践理性と社会性という人間らしい力によって形作られる」<sup>58</sup>としている。これらは、ヌスバウムの人間観を端的に表現したものだが、彼女にとっての人間とは、人の人生が受動的に形成され、流されていくのではなく、「他の人々と協力しあい互いに助け合いながら自分自身の生活を築いていく、尊厳をもった自由な存在」<sup>59</sup>なのである。ヌスバウムが強調する人間の協同性は、マルクスのいう協同性に通じている。

### 2) 受容することの前提となる「他者と等しい価値をもつ存在としての人間」

こうしたヌスバウムの人間観に基づいたケイパビリティ論において、彼女は、10のリストからなる中心的ケイパビリティ<sup>60</sup>を提示している。その中でも特に「連帯B」の「自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤をもつこと。他の人々と等しい価値をもつ尊厳のある存在として扱われること。労働については、人間らしく働くことができること。実践理性を行使し、他の労働者と相互に認め合う意味のある関係を結ぶことができること」<sup>61</sup>は、子育て家庭の孤立化の問題解決を考える上で重要となる。

それは、エピソード3で見たように、現代の子育て親は、自分の子育てに自信が持てず、また自分自身に対しても自信が持てない。現代の親世代の育ちの問題が、子育てをするときに立ち現れるのは、汐見(2000)、山本(1999)が既に指摘しているとおりである。親が自己肯定感<sup>62</sup>をとりもどす契機として、汐見が取り上げた保健師の「同意」や、日置の「受け止められることの重要性」は、先に述べたとおりである。

親に向き合う人々や、親の周りにいる人々が、親を受容することの前提には、ヌスバウムのいう「他の人々と等しい価値をもつ尊厳のある存在」であることが、お互いに理解されていなければならない。たとえ、どんなパーソナリティをもっていようと、ある種の「弱さ」を持っていようと、お互いがお互いを「他の人々と等しい価値を持つ尊厳のある存在」として認め合う条件が整っていれば、不利になることはない。

### 3) 学習の契機 — 実践理性との関連で

さらに、子育て家庭の孤立化の問題解決を目指す上では、ヌスバウムのいう「実践理性」が重要となる。この「実践理性」とは、「良き生活の構想を形作り、人生計画について批判的に熟考することができること」<sup>63</sup>であるが、このことは、子育て親にとって、学習の契機を要請する。たとえば、それは、「際限のない子どもの要求にどこまでも付き合い、疲弊する親」<sup>64</sup>を、親自身が我が事として対象化し、なぜそうになってしまうのかについて、熟考することの要請である。こうした親の学習は、子育ての矛盾を共に語り合うことによって深まっていく。親自身が内面化している「商品化された世界を前提にした評価の視点」や、「あるパーソナリティを持つことによって不利を被る社会関係の在り方そのもの」を対象化し、気付く

ことによって、社会的圧力を伴った子育ての規範意識そのものを相対的に捉えなおすことが可能となる。このことが、子育て家庭の孤立化の問題解決を考えると、ヌスパウムのいう「実践理性」の行使、すなわち「人生計画について批判的に熟考すること」につながるだろう。

子育て親が、「こうした子育てのやり方で本当によいのだろうか」と、他児比較をする中にも、実は、この実践理性の行使が存在していると考えられる。親が「子どものために」と思い、腐心すればするほど、思わぬ方向に自身の子育てが転倒してしまうことも、実は、この「よりよく生きよう」とする、実践理性の行使によるものなのである。

親が子どもを育てるという営みは、子どものケイパビリティを保障する働きかけであるといえる。子どもの生命、身体的健康、身体的保全、感覚・想像力・思考、感情のケイパリティの保障は、子どもにとっての世界を、安全で安心して生きていける場所にし、「基本的信頼」<sup>65</sup>を提供する。それは、親にとっても同様で、子育てをする上では、ケイパビリティの保障が重要な論点となる。岩田美香が特に問題視した「生活基盤が脆弱であるために生じる育児の問題や育児不安」が潜在化されること、すなわち「放置されたまま育児の困難」は、このケイパビリティが保障されていないことを意味する。「連帯B」の「自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤を持つこと。他の人々と等しい価値を持つ尊厳ある存在として扱われること」が、保障されたとき、親の多様性は尊重される。どんな「弱さ」やパーソナリティを持っていたとしても、それが子育てのしづらさや、生きづらさに直接的に結びつくことはない。

#### 4) 福祉と教育の統合におけるケイパビリティ論からの再構成

汐見(2007)は、困難を抱える人への関わり方には、基本的に二種類あることを、提起している。汐見は、「一つは、その人の内面に働きかけてその人の変容をはかること、もうひとつは、その人がよりよく生きるための、主として外的条件を整えてその人自身の努力を支えることである。前者は『教育』、後者は『福祉』と一般的には言われるが、困難を抱えている人に対しては、後者の働きかけを十全に行って、その人自身が自己変容を遂げる精神的ゆとりを獲得した上でなければ、前者の効果は期待するようには上がらない。下手をすると、困難を抱えている人により多くの課題を課すことによって、その人をさらに追い込むことを結果する。後者を重視することによって、前者が生きてくるという形で、両者は統一されなければならない」<sup>66</sup>として、教育と福祉の統一を訴えている。

この福祉と教育の連続も、ヌスパウムのケイパリティ論の視点から見ると、「他の人々と等しい価値を持つ尊厳ある存在」としての人間理解のプロセスとして捉えなおすことが可能となる。

## 6. 結論

以上の検討により、明らかにされた点は以下の5点である。

第一に、子育て家庭の孤立化は、消費生活一般における商品化・外注化によって進展した。資本による商品化が支配的になっていったとき、大量生産・大量消費の消費生活様式は、人々の生活規範のなかに浸透し、人々は「横並び」の生活様式を求めようになった。この「横並び」の感覚が、子育ての規範意識にも影響を与えた。その子育て規範は、「横並び」がで

きない状況に置かれた子育て家庭に対しては、社会的圧力を伴った子育ての規範意識として現れるようになった。これらの検討により、岩田美香の「二種類の孤立化」論における前者の孤立、すなわち資本の商品化による孤立によって、後者の孤立、「経済的要因や社会的偏見などにより、社会から遮断される形での孤立」が生み出されると結論づけた。

第二に、消費生活一般は、個々の家庭を前提としているため、子育てにおける商品化の進展は、仮説1における第2要素である、子育ての特殊性を更に強めることになることを提示した。子育てにおける資本の社会化が支配的になっていくとき、親子関係の不可避性は、よりいっそう、強まっていくことを指摘した。

第三に、こうして「親子カプセル」の状態がより強化されることにより、親は、子育てへの自信のなさから、さらに、新たな子育ての規範を模索せざるを得なくなる。それは、他児比較・他者からの叱責を通じてさらにエスカレートしていくことが確認された。

第四に、子育ての規範意識そのものが、二重性を持って存在していることを明らかにした。それは、一方では子どもの成長発達を保障する子育てのありかたを提示しつつも、他方では、当該社会システムを前提にした、次世代の労働力となる子どもを育てるといふ、子育てのありかたを示すものであった。この意味で、子どもの成長発達の目指すべき方向も、当該社会システムに規定されたものであることが確認された。

第五に、こうした孤立化の論理を解決するための方策として、ヌスパウムのケイパビリティ論を検討した。「他の人々と等しい価値を持つ尊厳ある」人間として相互に認めあうことで、互いに受容し、対話することが可能となり、その対話により、自己の人生を批判的に熟考する途が開けていくこと、そして、親に内面化されている社会的圧力を伴った子育ての規範意識そのものを、また、ある状況におかれた人のみが不利になるような社会関係そのものを、批判的にとらえ返すことが可能となる学習活動が、孤立化の問題解決の新たな地平を切り開くことを示唆した。

以上のことから、仮説1は以下のような書き換えが可能となる。

(結論への展開1)

$$\text{子育て家庭の孤立} = \text{< phase 1 >} \text{消費家族化・商品化} \times \text{< phase 2 >} \text{子育ての特殊性} \times \text{< phase 3 >} \text{ケイパビリティの欠如}$$



ケイパビリティの欠如を、ケイパビリティの保障の逆数として考えると、以下のようなになる。

(結論への展開2)

$$\text{子育て家庭の孤立} = \text{< phase 1 >} \text{消費家族化・商品化} \times \text{< phase 2 >} \text{子育ての特殊性} \times \frac{1}{\text{ケイパビリティの保障}}$$



更に、結論への展開 2 は、以下のような記述が可能となる。

(暫定的結論)	
	$\text{子育て家庭の孤立} = \frac{\begin{array}{cc} < \text{phase 1} > & < \text{phase 2} > \\ \text{消費家族化・商品化} & \times & \text{子育ての特殊性} \end{array}}{\text{ケイパビリティの保障} < \text{phase 3} >}$

## 7. 残された課題と今後の展望

本論においては、子育て家庭の孤立化の論理を明らかにすることにより、子育て親が「子育ての闇」から真に解放されるために、今、我々にできることは何かを考えてきた。子育て家庭の孤立化の問題解決の具体的な方策として、本論においては、ヌスバウムのケイパビリティ論を援用した。ヌスバウムのケイパビリティ論が目指すものは、一人ひとりが多様性と個性をもつ尊厳ある自由な存在である人間として、一人ひとりの人間が真に人間らしく生きられるようにする社会の実現である。このため、このリストをヌスバウムは憲法的保障の基礎として、政治目標に据えている。ケイパビリティのリストは、個人の努力によって達成されるものではなく、当該社会が保障するものなのである。我々はまさに、こうしたケイパビリティの実現を目指す社会を希求しなければならない。

ヌスバウムのケイパビリティ論の構造的な理解については、今後の課題となるが、ヌスバウムが提起したケイパビリティを高めていくために、具体的には、親子に深く浸透している既存の社会関係そのものを相対化し、子育ての矛盾を矛盾として受け止め、なおかつそれと向き合い続けてゆける力を獲得するための学習活動が必須となるだろう。これについては、別稿を用意したい。

尚、本論文中に登場する母親たちには、母親たちの会話・日記をデータとして本文中で使用する許可を得た。この場を借りてお礼申し上げたい。

## 引用文献

- 稲沢公一（2002）「援助者は『友人』たりうるのか —援助関係の非対称性」古川孝順，岩崎晋也，稲沢公一，児島亜紀子『援助するということ』有斐閣
- 岩田美香（2000）『現代社会の育児不安』家政教育社
- 汐見稔幸（2000）『親子ストレス』平凡社
- 宮崎隆志（1992）「地域関連労働の形成論理」山田定市，鈴木敏正編著『地域生涯学習の計画化[下] 社会教育労働と住民自治』筑波書房
- 岩田正美（1991）『消費社会の家族と生活問題』培風館
- 汐見稔幸（1996）『幼児教育産業と子育て』岩波書店
- 山本健慈（1999）「ダメな親，未熟な保母・教師でもいいじゃないか」横川和夫+アトム共同保育所編『ダメもとでええやんか 未熟な親と保母の育ち合い』
- 市原悟子（1997）アトム共同保育所編『大人が育つ保育園—アトム共保は人生学校』ひとなる書房
- 品田知美（2004）『＜子育て＞革命 親の主体性をとりもどす』中央公論新社
- ブチタンファン編集部編『読んでくれて，ありがとう』婦人生活社，1996
- 日置真世（2009）『日置真世のおいしい地域（まち）づくりのためのレシピ50』全国コミュニティライフサポートセンター
- マルクス（城塚登，田中吉六訳）『経済学・哲学草稿』岩波書店，1964
- マーサC.ヌスバウム（2005）（池本幸生，田口さつき，坪井ひろみ訳）『女性と人間開発』岩波書店
- 汐見稔幸（2007）「現代の家庭と子育て」高橋重安監修・児童福祉法制定60周年記念全国子ども家庭福祉会議実行委員会編『日本の子ども家庭福祉—児童福祉法制定60年の歩み』明石書店

## 参考文献

- 田中秀樹『消費者の生協からの転換』日本経済評論社，1998
- 牧野カツコ「育児における＜不安＞について」『家庭教育研究所紀要』第2号，1981
- 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』第3号，1982
- 牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第4号，1983
- 牧野カツコ・中西雪夫「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—」『家庭教育研究所紀要』第6号，1985
- 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第9号，1987
- 牧野カツコ「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』第10号，1988
- 大田堯『地域の中で教育を問う』新評論，1989
- 大田堯『教育とは何か』岩波書店，1990
- 汐見稔幸「わが国における公共性の実現と男性の育児参加問題」高石恭子編『育てることの困難』人文書院，2007
- 有井行夫『マルクスの社会システム理論』有斐閣，1987
- 鈴木佐喜子『現代の子育て・母子関係と保育』ひとなる書房，1999
- ブチタンファン編集部編『続・読んでくれて，ありがとう』婦人生活社，2001
- 沢山美果子，岩上真珠，立山徳子，赤川学，岩本通弥『「家族」はどこへ行く』青弓社，2007
- 小出まみ『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房，1999
- 柳田國男『定本柳田國男集 第十五巻』筑摩書房，1969

宮崎隆志「家族の危機と協同的支援ネットワークの課題」『北海道大学大学院教育学研究院 こども発達臨床研究 第2号』2008  
ウルリヒ・ベック『危険社会』法政大学出版社, 1998

- 
- 1 汐見稔幸『親子ストレス』平凡社, 2000, p 84
  - 2 同上, p 82
  - 3 同上, p 82
  - 4 同上, p 82
  - 5 同上, p 85
  - 6 同上, p 85
  - 7 例えば, 岩田正美『消費社会の家族と生活問題』(培風館, 1991)や, 田中秀樹『消費者の生協からの転換』(日本経済評論社, 1998)の議論など。
  - 8 稲沢公一「援助者は『友人』たりうるのか —援助関係の非対称性」古川孝順, 岩崎晋也, 稲沢公一, 児島亜紀子『援助するということ』有斐閣, 2002, pp161~196
  - 9 岩田美香『現代社会の育児不安』家政教育社, 2000, p 181
  - 10 マーサ C.ヌスバウム (池本幸生, 田口さつき, 坪井ひろみ訳)『女性と人間開発』岩波書店, 2005
  - 11 本論末尾の参考文献において牧野カツコの一連の育児不安研究論文を提示した。
  - 12 岩田美香, 前掲書, p182
  - 13 同上, p2
  - 14 同上, p2
  - 15 同上, p2
  - 16 同上, p3
  - 17 同上, p3
  - 18 同上, p181
  - 19 同上, p181
  - 20 同上, p180
  - 21 同上, p181
  - 22 同上, p181
  - 23 同上, p181
  - 24 同上, p182
  - 25 宮崎隆志「地域関連労働の形成論理」山田定市, 鈴木敏正編著『地域生涯学習の計画化 [下] 社会教育労働と住民自治』筑波書房, 1992, pp101~107
  - 26 同上, p105
  - 27 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店, 1996, p14
  - 28 同上, p16
  - 29 同上, p16
  - 30 同上, p93
  - 31 岩田正美『消費社会の家族と生活問題』培風館, 1991, p14
  - 32 同上, p14
  - 33 同上, pp14~15
  - 34 山本健慈「ダメな親, 未熟な保母・教師でもいいじゃないか」横川和夫+アトム共同保育所編『ダ

- メもとでええやんか 未熟な親と保母の育ち合い』, 1999, p156
- 35 プチタンファン編集部編『読んでくれて、ありがとう』婦人生活社, 1996, pp31~32
- 36 同上, p22
- 37 山本, 前掲書, p156
- 38 市原悟子 (1997) アトム共同保育所編『大人が育つ保育園—アトム共保は人生学校』ひとなる書房
- 39 稲沢, 前掲書, pp161~196
- 40 品田知美『<子育て法>革命 親の主体性をとりもどす』中央公論新社, 2004, p10
- 41 同上, まえがき, iv
- 42 同上, p133
- 43 同上, pp7~8
- 44 同上, p141
- 45 岩田美香, 前掲書, pp175~176
- 46 汐見, 2000年, 前掲書, pp70~79, pp91~103
- 47 プチタンファン編集部, 前掲書, p20
- 48 同上, p20
- 49 同上, pp 20~21
- 50 日置真世『日置真世のおいしい地域 (まち) づくりのためのレシピ50』全国コミュニティライフサポートセンター, 2009, p36
- 51 同上, p36
- 52 同上, p39
- 53 マルクス (城塚登, 田中吉六訳) 『経済学・哲学草稿』岩波書店, 1964, p93
- 54 同上, pp93~94
- 55 ヌスバウム, 前掲書, p87
- 56 同上, p87
- 57 同上, p86
- 58 同上, p86
- 59 同上, p86
- 60 ヌスバウムの中心的ケイバビリティは、以下の10のリストからなる。(1) 生命, (2) 身体的健康, (3) 身体的保全, (4) 感覚・想像力・思考, (5) 感情, (6) 実践理性, (7) 連帯 A・B, (8) 自然との共生, (9) 遊び, (10) 環境のコントロール A政治的 B物質的尚, それぞれの詳細にわたる内容については、前掲書, p93~94を参照して頂ければ幸いです。
- 61 同上, p94
- 62 例えば, 汐見, 2000年, 前掲書, p 99など。
- 63 ヌスバウム, 前掲書, p93
- 64 品田, 前掲書, pp136~139
- 65 E.H.エリクソン (仁科弥生訳) 『幼児期と社会1』みすず書房, 1977, pp317~322
- 66 汐見稔幸「現代の家庭と子育て」高橋重宏監修・児童福祉法制定60周年記念全国子ども家庭福祉会議実行委員会編『日本の子ども家庭福祉—児童福祉法制定60年の歩み』明石書店, 2007, p87